

研究ノート

国際観光が観光者の対ホスト国イメージに与える影響

——ポピュラー文化と地域文化に触れる観光を事例として——

滝 知 則

(人間社会学部 国際観光学科)

International Tourism and Its Influence on  
Tourists' Impression of Host Country:  
the case of a tour to experience popular culture and  
local community culture in Japan

Tomonori TAKI

(Department of International Tourism,  
Faculty of Human and Social Studies)

Summary

This article considers whether tourism experience, in which international tourists are exposed to popular culture and local community culture of destination country, can affect the tourists' impression of the host country. This consideration will be made on an assumption that international tourism may be able to contribute to making of regional identity. Chapter 1 discusses whether making of regional identity is possible in contemporary Asia. Chapter 2 reports results of opinion polls on how the Japanese and the Chinese, as well as the Japanese and the South Koreans, see each other. In Chapter 3, results of a questionnaire that author has carried out to tourists participated in a study tour that the author conducted. In addition to nationalism, regional identity may become a source of collective identity in international relations. However, making of regional identity has barely started in East Asia. This dovetails with a fact that negative images exist between Japan and China, as well as Japan and South Korea. Results of the questionnaire indicate that some of participants in the above tour tend to distinguish diplomatic issues between the governments on one hand, and personal interests as tourists on the other. This is the case with those who retain positive interests to Japan before the tour begins. These results suggest that experiences in international tourism may support or strengthen tourists' positive image toward the host country which have been made prior to the tour.

Key words

International Tourism, Nationalism, Regional Identity, Popular Culture, Local Community Culture

要 約

本稿は、国際観光が地域アイデンティティの形成に貢献しうる可能性を踏まえ、ポピュラー文化と地域社会の文化を知る観光が、観光者のホスト国に対するイメージに与える影響の有無を考察する。第1章と第2章では文献調査を行い、第3章では筆者が実施した観光に関するアンケート調査結果を報告する。国際関係における集団アイデンティティとして、ナショナリズムに加え、地域アイデンティティが考えられる。ただし東アジアでは、地域アイデンティティの構築は進んでいない。この状況は、日本と中国、日本と韓国の間で、相手の国に対するマイナスのイメージが強いことと、表裏一体をなしている。筆者が行った調査からは、国家間の外交問題と観光者個人の関心事を区別する傾向の存在することが、

示唆される。ただしこれは、元々日本に対して好意的なイメージを持っていた観光者に当てはまる。国際観光は、ホスト国に対する既存のプラスのイメージを裏付けたり補強したりする可能性が、考えられる。

### キーワード

国際観光、ナショナリズム、地域アイデンティティ、ポピュラー文化、地域文化

### はじめに

本稿は、ポピュラー文化と地域社会の文化を知る観光が、観光者の国際関係の認識、より具体的にはホスト国に対するイメージに、影響することがあるかどうかを考察する。

筆者は、ポピュラー文化を対象とする観光が、地域アイデンティティの形成に影響しうる可能性を述べたことがある（滝 2015）。これを踏まえ本稿では、観光と地域アイデンティティの形成に向けた動きの間に、どのような関係があるかを調査する。

本稿の構成は次の通りである。第1章では、まず、国際関係における集団アイデンティティには、ナショナリズムと地域アイデンティティがあることを述べる。次に、地域アイデンティティ構築への取り組みが、東アジアでは進んでいないことを報告する。さらに、東アジアでの地域アイデンティティ構築に向け、(国際的な範囲の)地域文化の創造が貢献しうる可能性に言及する。

第2章では、東アジアにおける地域アイデンティティの構築の現状を報告する。日本と中国、ならびに日本と韓国では、相手国に対しプラスのイメージを持つ人たちよりも、マイナスのイメージを持つ人たちの方が多い。このようなマイナスのイメージ形成には、マスメディアの影響が大きい。ただし、影響の程度が比較的小さいとはいえ、観光も、日本に対するイメージの形成に寄与していることを述べる。

第3章では、筆者が実施した観光に関わるアンケート調査の結果を報告する。観光者は留学生たちと日本人学生たちであり、観光対象は日本のポピュラー文化と地域社会の文化である。こうした観光の体験が、お互いの相手の国に対

するイメージに影響したかどうかを調査した。調査に回答した留学生たちには、観光の開始以前に現代日本に対してもともとプラスのイメージを持つものが多かった。この観光の実施は、そうしたプラスのイメージを、何らかの形で補強する効果をもたらした可能性が、考えられる。このことは、国際観光が、ゲスト個人とホスト国の間での、良好な国際関係の構築に貢献できる余地が皆無ではないことを、示唆していると考ええる。

## I 現代アジアにおける地域アイデンティティの可能性

### 1 地域アイデンティティと観光

この節では、本稿で地域アイデンティティと観光の関係を取り上げる理由を述べる。

集団アイデンティティの根拠は、人間が自分の存在に納得して生きていくうえで必要と考える。そのような集団アイデンティティの一つとして、ナショナリズムがある。周知の通り、ナショナリズムは、日常生活に広く深く浸透している。またナショナリズムが、暴力的な政治に影響を与えることも事実である。

一方でナショナリズムは、近代の国際関係の文脈の中で作られた集団アイデンティティである（アンダーソン 1997、ゲルナー 1983）。こうした歴史性を踏まえると、集団アイデンティティの最大規模のものがナショナリズムに限られないと考えることが、不可能ではない<sup>1)</sup>。ナショナリズムが今後全くなくなるべきとも、なくすることが可能とも、筆者は考えない。しかし、ナショナリズムに加え、別の集団アイデンティティが可能であるし、必要でもあると考える。

ナショナリズムとは別の集団アイデンティティ

として、ドイチュ (Deutsch 1957) は地域アイデンティティ概念を唱えた。ドイチュは、安全保障共同体の形成を通じて地域主義を進めることを主張した。その関連で、留学や旅行が頻繁に行われるというような国際交流が、安全保障共同体の形成に寄与する可能性に言及している<sup>2)</sup>。

## 2 現代アジアと地域アイデンティティの可能性

### (1) 地域アイデンティティとは？

ここではまず、「地域アイデンティティ」として筆者が何を考えているかを述べる。本稿でとりあげる「地域アイデンティティ」での「地域」とは、国際関係におけるもの、つまり個別の国家と国際社会全体の間中に位置づけられるまとまりのことである。したがって、「まちおこし」や「地域おこし」が論じられる際のサブステートレベルの「地域」とは異なる。あるいは大都市と対比される農村部や地方都市という意味の「地域」、ないし地域社会とも異なる。

大庭 (2000) によれば、国際関係におけるアイデンティティには2種類がある。一つは個人の国家ないしその他のトランスナショナルないしその他のトランスナショナルないしグローバルな対象への帰属意識である。もう一つは、「国家」そのものが持つアイデンティティである (p. 107)。これら2種類のアイデンティティは相互に関係するが、本稿では特に1番目のアイデンティティに注目する。

筆者の考える地域アイデンティティとは、ナショナル・アイデンティティと併存する、国際関係における集団アイデンティティである。このような集団アイデンティティが存在することで、異なる国家間の摩擦の減少に、何らかの形で貢献することが期待される。そのような貢献には、例えば、民族差別を含む排他的ナショナリズムへの対応が考えられる。

### (2) 現代アジアに地域アイデンティティは構築されているか？

地域主義が論じられる際には、ヨーロッパ共同体 (European Union, EU) が「手本」として取り上げられることがしばしばである。しかし、現代アジアとEUを共時的に比較しようとしても、得るものは小さい。現代アジアとEUについては、通時的な比較が行われるべきである。つまり、アジアにおける地域主義を論じる際には、21世紀初頭のアジアとヨーロッパのそれぞれがおかれた状況の違いを意識すべきと考ええる。

EUに比べ、アジアでは地域主義が進んでいない。ただしアジアにおいても東南アジアと北東アジア (日本、中国、韓国) では、状況が異なる。東南アジアでは地域主義が進行しており、地域アイデンティティ構築への試みもなされている。しかし北東アジアでは、いずれも進んでいない (金 2013: 146、笹岡 2012: 253、吉野 2012: 265)。

アジアで地域主義が進まず、地域アイデンティティも弱い理由として、少なくとも3点が挙げられる。第1点は、例えば今日のヨーロッパと比べ、アジアではナショナリズムが強いことである (笹岡 2012: 247)。これに関連する第2点として、20世紀前半の日本による占領の記憶がある (笹岡 2012: 252)。第3点として、欧州では、独仏が統合の中心としての役割を果たしているのに対し、アジアにはそのような中心となる国がないことが挙げられる (金 2013: 146)。アジアにおける地域主義への動きには、米国が関与していることも、特徴の一つである (笹岡 2012: 252)<sup>3)</sup>。

### (3) 現代アジアに地域アイデンティティが構築される可能性はあるか？

上述したように、アジア (特に北東アジア) において地域主義が進行しているとはいいいがたく、また地域アイデンティティも形成されていない。しかし、この状態が将来変化する可能性

を、完全に排除することもできないと、筆者は考える。変化の可能性を排除できない理由と、変化させるにはどのような方法がありうるのかを次に示す。

#### a. 地域主義と地域アイデンティティの関係

アジアにおける地域主義の状況は、東南アジアと北東アジアとで異なる。東南アジアではASEANが1967年に設立されている。ASEANでの共通アイデンティティ形成への取り組みは、1992年4月に開始されている(吉野 2012: 265)。しかし東アジアでは、公式な組織形成も、地域の集団アイデンティティの形成も、まだである。

とはいえ、公式な組織が形成されなければ地域アイデンティティは決してできないというような、一方通行の線型的な関係ではないと、筆者は考える。例えば国際政治学者の吉野(2012)は、「実態としての統合の進展と共通のアイデンティティ形成とは相互に作用しあい、互いに不可欠な基盤となっている」と述べている(p. 274)。このような相互作用は、異なる大きさの集団に属する人間の集団アイデンティティ形成に共通する。ナショナリズムの形成の過程でも、同様の過程を経ている。

#### b. 「東アジア文化」の形成、親近感の醸成

紛争のおそれの低減、経済活動のさらなる活発化、それらの延長線上の地域主義の公式な組織の形成などが、北東アジアを含むアジアの地域主義に必要であると考えられる。さらにこれらと並行して、文化面での地域主義を探ることも、必要と考える。

文化面での地域主義の可能性を探る具体的な枠組みとして、国際政治学者の倉田(2006)は、「東アジア文化」の構築を提案する(p. 1)。倉田は、「東アジアという国民国家の上位への動きと、国家内部の小地域という国民国家の下位への動き」によって、東アジアに存在する強固なナショナリズムを克服する糸口が見いだせるのではないかと述べる(p. 8)。

そのような糸口を探すためのより具体的な方法は、サブ国家レベルの文化に注目し、それを

東アジア地域の視点から俯瞰することである。「国民国家の下位にある地域の文化の発掘を進め、それを東アジア大の規模で俯瞰することによって、東アジアの文化的特徴を浮き彫りにするという方法」を、倉田は提案する(p. 9)<sup>45)</sup>。いまだ不十分ではあるが、この方法を念頭において当研究を行った。

## II 東アジアにおける対外イメージの現状とその形成に寄与する要因

2015年の訪日観光客数は、中国が499万人、韓国が400万人、台湾が368万人である。また米国は103万人である(日本政府観光局 2016)。これを踏まえ、この章では、中国と韓国からの来訪が、日本と両国の国際関係のそれぞれに影響を及ぼすことがあるかどうかを、次の2つの段階を踏んで検討する。

まず、日本と中国ならびに日本と韓国で、お互いに相手国に対しどのような印象を持っているかを、世論調査の結果の引用を通じ、確認する。次に、そのような印象の形成の過程に、観光がどの程度の影響力を持ちうるかを述べる。

### 1 日本人の中国と韓国に対する印象

まず、日本人が中国と韓国に対して持つ印象について述べる。ここでは、内閣府の世論調査結果を用いる。なおこの世論調査では、日本人の米国に対する印象も報告されている。日本の国際関係にとり重要性の特に高い3つの国々である。

この調査で、米国、中国と韓国に対して「親しみを感じる」と答えた日本人回答者の比率の推移は、図2-1と表2-1に示す通りである。ここでは平成17(2005)年から平成26(2014)年までの結果を示す。

次に、米国、中国と韓国に対して「親しみを感じない」と答えた日本人回答者の比率の推移は、図2-2と表2-2に示す通りである。

この世論調査に過去10年の間に回答した日本人のうち、米国に対し「親しみを感じる」度合

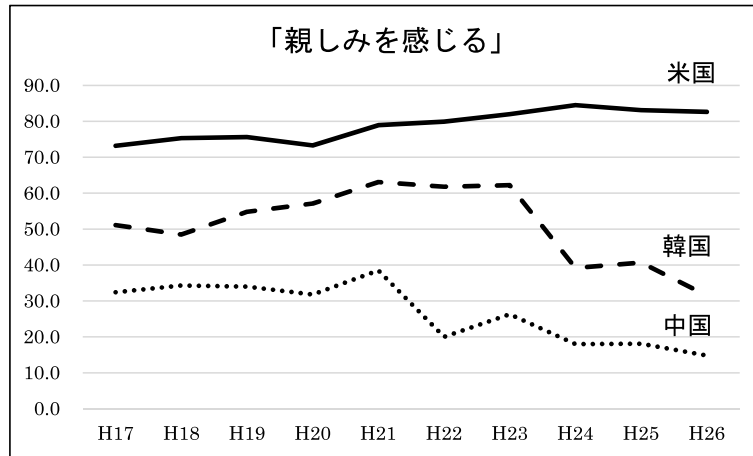


図 2-1 米国・中国・韓国に「親しみを感じる」と答えた日本人回答者の比率 (%)  
出典：外交に関する世論調査（内閣府大臣官房政府広報室）

表 2-1 米国・中国・韓国に「親しみを感じる」と答えた日本人回答者の比率 (%)

	H17 (2005)	H18 (2006)	H19 (2007)	H20 (2008)	H21 (2009)	H22 (2010)	H23 (2011)	H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)
米国	73.2	75.3	75.6	73.3	78.9	79.9	82.0	84.5	83.1	82.6
中国	32.4	34.3	34.0	31.8	38.5	20.0	26.3	18.0	18.1	14.8
韓国	51.1	48.5	54.8	57.1	63.1	61.8	62.2	39.2	40.7	31.5

出典：外交に関する世論調査（内閣府大臣官房政府広報室）

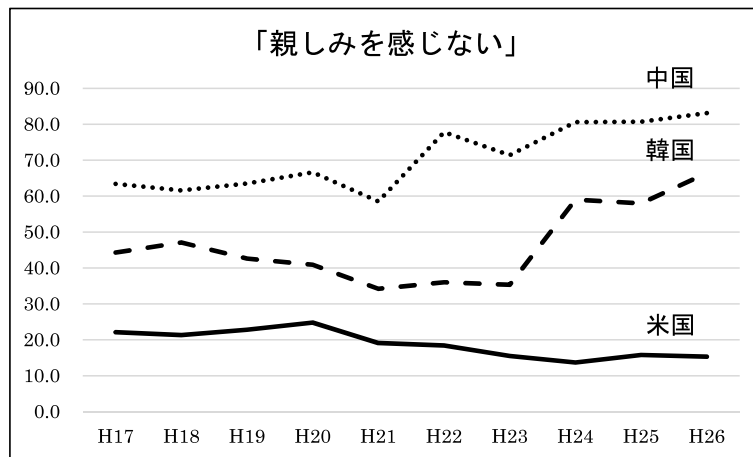


図 2-2 米国・中国・韓国に「親しみを感じない」と答えた日本人回答者の比率 (%)  
出典：外交に関する世論調査（内閣府大臣官房政府広報室）

表 2-2 米国・中国・韓国に「親しみを感じない」と答えた日本人回答者の比率 (%)

	H17 (2005)	H18 (2006)	H19 (2007)	H20 (2008)	H21 (2009)	H22 (2010)	H23 (2011)	H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)
米国	22.1	21.3	22.8	24.8	19.1	18.4	15.5	13.7	15.8	15.3
中国	63.4	61.6	63.5	66.6	58.5	77.8	71.4	80.6	80.7	83.1
韓国	44.3	47.1	42.6	40.9	34.2	36.0	35.3	59.0	58.0	66.4

出典：外交に関する世論調査（内閣府大臣官房政府広報室）

いは7割から8割である。一方、中国に対し「親しみを感じる」比率は1割台から4割弱であった。そして韓国に対しては、4割から6割強の間であった。

次に、米国に対し「親しみを感じない」と答えた比率は、1割台から2割強であった。

中国に「親しみを感じない」と答えた比率は6割弱から8割強であり、韓国に対しての同じ答えの比率は3割から6割強であった。

今日の日本にとり、最大の貿易相手国は中国であり、訪日観光客数の最も多いのも中国になった(2015年)。近年の経済的な結びつきの方で、日本人が、米国に対し好意的なイメージを持っていることが、上記の世論調査結果に示されている。このことから、日本と米国の20世紀後半の外交関係ならびに経済関係、さらには米国の文化の影響の強さが、うかがわれる。

## 2 日本と中国の、それぞれの相手国に対する印象

### (1) 世論調査の結果

この節では、中国人が日本に対して持っている印象を伝えるものとして、言論 NPO が公表している世論調査の結果を示す。

中国人の日本に対する印象で、「良い」は1割弱から3割台である。一方、「悪い」は3割台から9割台である。

中国人の日本に対する印象で、「良い」は1割弱から3割台である一方、「悪い」は3割台から9割台である。また日本人の中国に対する印象で、「良い」は1割弱から3割台である一方、「悪い」は3割台から9割台である。

つまり「良い」についても「悪い」についても、相手国に対する印象がおおむね同様の傾向を示している。なお日本人の中国に対する印象は、先に引用した内閣府の世論調査結果とほぼ

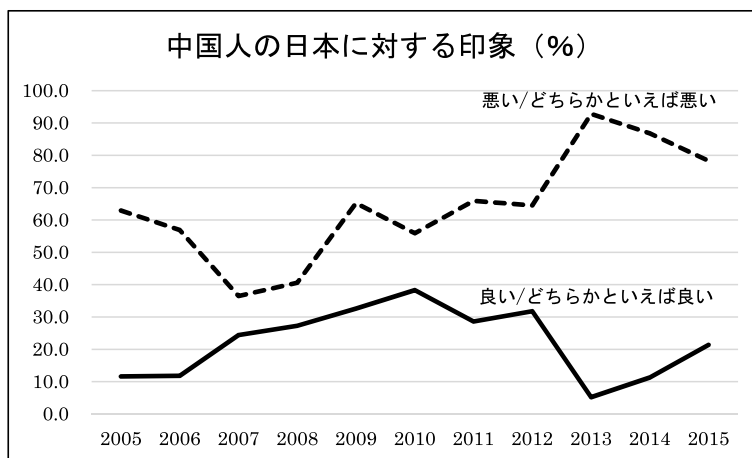


図 2-3 中国人の日本に対する印象

出典：言論 NPO (2014)

表 2-3 中国人の日本に対する印象 (第10回、1. 日中両国に対する印象, p. 3)

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
良い/どちらかといえば良い	11.6	11.8	24.4	27.3	32.6	38.3	28.6	31.8	5.2	11.3	21.4
悪い/どちらかといえば悪い	62.9	56.9	36.5	40.6	65.2	55.9	65.9	64.5	92.8	86.8	78.3

出典：言論 NPO (2014)

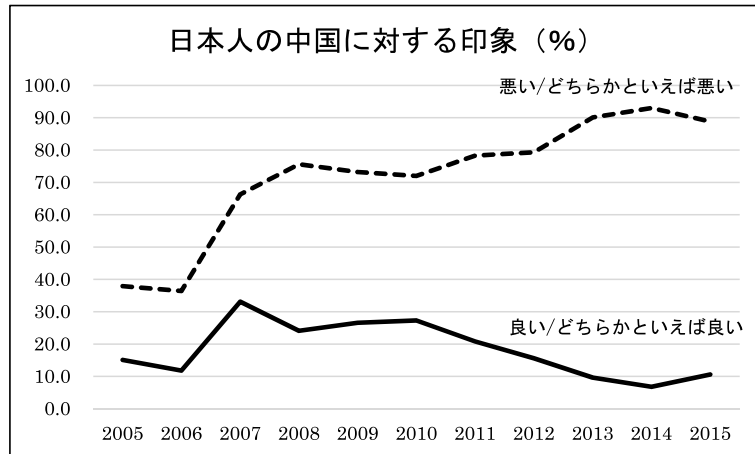


図 2-4 日本人の中国に対する印象  
出典：言論 NPO (2014)

表 2-4 日本人の中国に対する印象

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
良い/どちらかといえば良い	15.1	11.8	33.1	24.1	26.6	27.3	20.8	15.6	9.6	6.8	10.6
悪い/どちらかといえば悪い	37.9	36.4	66.3	75.6	73.2	72.0	78.3	79.3	90.1	93.0	88.8

出典：言論 NPO (2014)

同様の傾向がみられる<sup>6)</sup>。

(2) 日本に対する印象はどのように形成されるか？

この調査に回答した中国人の間での、日本に対する印象の推移は、上に示した通りである。では、こうした印象はどのように形成されるのだろうか。この問いに答えることは簡単ではない。しかしながら、一定の傾向を示唆する調査

結果があるので、これを紹介したい。

次の表 2-5 は、中国の世論における、日本や日中関係についての情報源を尋ねた結果を示している。これによれば、ニュース・テレビや映画の影響が大きいことがうかがわれる。一方、日本を訪問した経験を挙げた回答者は多い時で 8%弱、少ない年では 0.5%であった。

この調査に回答した中国人の間で、観光の経験の影響力が、マスメディアの影響力にはるか

表 2-5 相手国や日中関係についての情報源 (中国世論)<sup>8)</sup>

	2011	2012	2013	2014	2015
(1) 中国のニュースメディア	86.8	84.3	89.1	91.4	89.6
(2) 中国のテレビドラマ・情報番組、映画作品	59.4	54.0	65.3	61.4	57.6
(3) 中国の書籍 (教科書も含む)	33.7	32.7	36.3	37.4	30.1
(4) 日本への訪問	—	7.7	0.5	1.8	—
(5) 家族や友人・知人の経験	—	—	5.8	3.4	—

(「—」は、調査結果の報告がないことを示す)  
出典：言論 NPO (2014)

に及ばないことは、事実である。しかしマスメディアが伝えることは「また聞き」であるのに対し、観光を通じての経験は、本人にとって現実である。それゆえ、マスメディアが伝える内容に対する反証たりうる<sup>7)</sup>。

また、「家族や友人・知人の経験」にも、筆者は着目する。自分で観光するまでに至らなくとも、自分の身近な人から聞いたことが、マスメディアの伝えることとは異なる「現実」を示す場合がありうると考える。

### 3 日本と韓国の、それぞれの相手国に対する印象

言論 NPO が韓国側のパートナーと共同で実施した、日本と韓国の相手国に対する印象の調査は、本稿執筆の時点までに、3 回実施されている。上述した、日本と中国についての調査と比べると、調査の回数は少ない。そのため、時系列に沿った推移を見ることには困難がある。しかしながら、直近 2 年間の調査結果は、日本と中国の相手国に対する印象と同様の傾向が、日本と韓国の間にも存在することを示している。

日本に対する印象が良いと答えた韓国人の回答者は 2 割弱、悪いと答えた人は 7 割以上であっ

た。また日韓関係に対する印象について、良いと答えた人は 3 % 以下、悪いと答えた人はほぼ 8 割であった。

相手国や日韓関係についての情報源では、マスメディア、テレビドラマと書籍の影響が圧倒的に大きい。一方日本への訪問の比率は、6 % 弱から 7 % である。家族や友人・知人の経験は 3 割から 4 割台半ばまでである（これらのソースが占める比率は、中国に比べると高い<sup>9)</sup>。

## 4 ま と め

世論調査の結果によれば、日本人の中国と韓国に対する好印象の比率は、米国に対する場合よりも低い。また中国人も韓国人も、日本に対する好感度は低い。

中国と韓国において対日イメージの形成に影響するメディアはテレビと書籍の役割が大きい<sup>10)</sup>。反対に旅行の経験や家族の話の比率は、相対的に小さい。しかし旅行者本人の経験や、その経験談を直接聞くことは、マスメディアが伝えるイメージの反証となる可能性が期待される。

つまりこの章に示したデータから、その効果の程度が限定的であるとはいえ、観光が国際関係にプラスの影響を及ぼしうる可能性を持つと

表 2-6 韓国人の日本に対する印象 (%)

	2014	2015
良い/どちらかといえば良い	17.5	15.7
悪い/どちらかといえば悪い	70.9	72.5

出典：言論 NPO (2015)

表 2-7 韓国人の日韓関係に対する印象 (%)

	2014	2015
良い/どちらかといえば良い	2.3	2.6
悪い/どちらかといえば悪い	77.8	78.3

出典：言論 NPO (2014)

表 2-9 相手国や日韓関係についての情報源 (韓国世論) (%)

	2013	2014	2015
ニュースメディア	94.0	91.3	94.6
テレビドラマ	37.5	55.2	58.1
書籍	12.6	24.4	16.6
日本への訪問	5.9	7.1	5.7
家族や友人・知人の経験	30.3	38.7	44.0

出典：言論 NPO (2014)



考えることが、可能である。

### Ⅲ ポピュラー文化とサブステートレベルの文化に触れる観光が観光者に与える影響

筆者は2015年に、ポピュラー文化ならびに日本の地域社会の文化を観光対象とする研修を実施した<sup>11)</sup>。この研修は、留学生と日本人学生が受講している。この研修の受講生たちを対象に、現代アジアの国際関係と、観光との関係についての考えを尋ねた。第3章では、このアンケート調査の結果を報告する<sup>12)</sup>。

#### 1 調査の概要

この調査の概要は、次の通りである。

- a. 調査対象 長崎国際大学人間社会学部国際観光学科で実施された「国内観光研修D」の履修者 29人
- b. 調査方法 アンケート調査<sup>13)</sup>
- c. 回答者数 17人（留学生14人、日本人学生3人）<sup>14)</sup>。

#### 2 調査結果

##### (1) 回答者の出身国と出身地

問1と問2では、回答者の出身国と出身地(省・道・県レベル)を尋ねた。その結果は、中国人留学生 13人(陝西省、江蘇省、上海市、浙江省、福建省、遼寧省)、ベトナム人留学生 1人(ナンディン市)、そして日本人学生 3人(大阪府、長崎県)であった。

中国からの留学生の出身地については、沿海部の省からの人たちが多くわかる。

表3-1 回答者の出身国と出身地

出身国	出身地	人数(人)
中国	陝西省、江蘇省、上海市、浙江省、福建省、遼寧省	13
ベトナム	ナンディン市	1
日本	大阪府、長崎県	3

(2) 留学生の出身国全体での日本に対するイメージ問3では、留学生の出身国全体での日本に対するイメージを尋ねた。開始時には、c(どちらでもない)が4人、d(まあ良い)が7人、e(とても良い)が3人であった。終了時には、c(どちらでもない)7人、d(まあ良い)7人(それぞれ50%)、であった。

開始時と終了時を比較すると、eと答えた人数が3人減少している。

表3-2 留学生の出身国全体での日本に対するイメージ

	開始時	終了時
c(どちらでもない)	4	7
d(まあ良い)	7	7
e(とても良い)	3	0

(3) 回答した留学生自身の日本に対するイメージ問4では、留学生自身の日本に対するイメージについて尋ねた。開始時には、c(どちらでもない)が3人、d(まあ良い)が8人、e(とても良い)が3人であった。終了時には、cが4人、dが6人、eが4人であった。

表3-3 留学自身の日本に対するイメージ

	開始時	終了時
c(どちらでもない)	3	4
d(まあ良い)	8	6
e(とても良い)	3	4

##### (4) 留学生の出身国と日本との懸案

問5では、留学生の出身国と日本との懸案で、最も気になることを尋ねた。開始時には、a(安全保障・軍事)が2人、b(貿易・経済)が5人、c(環境)が2人、d(歴史認識)が4人であった。終了時には、aが4人、bが3人、cが3人、dが3人であった。なお問5でe(その他)を選んだ留学生はいなかった。

開始時と終了時を比較すると、d(まあ良い)が2人減り、c(どちらでもない)とe(とても良い)が1人ずつ増えている。

表 3-4 留学生の出身国と日本との懸案

	開始時	終了時
a (安全保障・軍事)	2	4
b (貿易・経済)	5	3
c (環境)	2	3
d (歴史認識)	4	3

開始時と終了時を比較すると、a (安全保障・軍事) が 2 人増加、b (貿易・経済) が 2 人減少、c (環境) が 1 人増加、d (歴史認識) が 1 人減少した。

#### (5) 懸案と観光の優先度

問 6 では、留学生の出身国と日本との懸案と観光では、どちらを重視するかを尋ねた。開始時には、a (懸案解決が最優先) が 2 人、b (懸案解決をやや優先) が 3 人、c (どちらも同じくらい重要) が 5 人、d (観光をやや優先) が 3 人であった。終了時には、a が 2 人、b が 4 人、c が 7 人、d が 1 人であった。e (観光が最優先) を選んだ留学生はいなかった。

表 3-5 懸案と観光の優先度

	開始時	終了時
a (懸案解決が最優先)	2	2
b (懸案解決をやや優先)	3	4
c (どちらも同じくらい重要)	5	7
d (観光をやや優先)	3	1

開始時と終了時を比較すると、a (懸案解決が最優先) は変わらず、b (懸案解決をやや優先) が 1 人増加、c (どちらも同じくらい重要) が 2 人増加、d (観光をやや優先) が 2 人減少している。

#### (6) 自国の文化と日本の文化の間にあるべき関係

問 7 では、自国の文化と日本の文化の間に、

どのような関係があるべきかを尋ねた。開始時には、b (自国の文化よりも日本の文化を受け入れるべき) が 1 人、c (日本でも自国でもない、世界的な文化を持つことを目指すべき) が 3 人、d (日本の文化と自国の文化の、双方のよいところに注目すべき) が 10 人であった。終了時には、b が 1 人、c が 1 人、d が 12 人であった。

表 3-6 自国の文化と日本の文化の間にあるべき関係

	開始時	終了時
b (自国の文化よりも日本の文化)	1	1
c (日本でも自国でもない、世界的な文化)	3	1
d (双方のよいところに注目)	10	12

開始時と終了時を比較すると、b (自国の文化よりも日本の文化を受け入れるべき) は変わらず、c (世界的な文化) が 2 人減少、d (双方のよいところに注目すべき) が 2 人増加している。

#### (7) 問 3 から問 7 までのまとめ

問 3 から問 7 までは留学生 14 人が回答した。その内容をここで次のように整理できる。第 1 に、自国全体としての対日イメージについて、悪いと認識している回答者はいなかった。第 2 に、回答した留学生本人の対日イメージ (終了時) では、「まあ良い」「とても良い」を合わせて 10 人であった。第 3 に、自国と日本の (外交上) の懸案については、4 つの選択肢におおむね均等に分かれた。第 4 に、政府間の懸案と観光の優先度については、双方とも重要と考えるものが最も多かった。第 5 に、自国の文化と日本の文化との関係については、双方のよいところに注目すべきと考えるものが最も多かった。

問 8 から問 12 までは、日本人学生 3 名が回答した。その結果は次に示す通りである。

(8) 中国、韓国またはベトナムに対する、日本全体のイメージ

開始時の時点で、日本全体の中国に対するイメージを答えたものが2人、韓国に対するイメージを答えたものが1人であった。5つの選択肢から、b（やや悪い）を選んだものが3人であった。終了時には、日本全体の中国に対するイメージを答えたものが3人で、bが3人であった。

開始時と終了時を比較すると、対象とする国に違いがあるものの、b（やや悪い）と答えた人数に変化はなかった。

(9) 回答した日本人学生の、中国、韓国またはベトナムに対するイメージ

問9では、日本人学生自身の中国、韓国またはベトナムに対するイメージについて尋ねた。開始時には、b（やや悪い）が1人、c（どちらでもない）が2人であった。終了時には、bが2人、cが1人であった。

開始時と終了時を比較すると、b（やや悪い）が1人増え、c（どちらでもない）が1人減っている。

(10) 日本と留学生の出身国の間の懸案

問10では、日本と留学生の出身国の間の懸案で、最も気になることを尋ねた。開始時には、a（安全保障・軍事）が1人、b（貿易・経済）が2人であった。終了時には、b（貿易・経済）が2人、c（環境）が1人であった。

開始時と終了時を比較すると、a（安全保障・軍事）が1人減り、b（貿易・経済）は変わらず、c（環境）が1人増えている。

(11) 懸案と観光の優先度

問11では、懸案と観光のどちらを重視するかを尋ねた。開始時には、b（懸案解決をやや優先）が1人、d（観光をやや優先）が2人であった。終了時には、a（懸案解決が最優先）が1人、bが1人、c（どちらも同じくらい重要）が1人。

開始時と終了時を比較すると、a（懸案解決が最優先）が1人増え、bは変わらず、cが1人増え、dが2人減っている。

(12) 自国の文化と留学生の国の文化の間にあるべき関係

問12では、自国の文化と日本の文化の間に、どのような関係があるべきかを尋ねた。

開始時には、d（日本の文化と自国の文化の、双方のよいところに注目すべき）が3人であった。終了時には、b（日本の文化がもっとも大切）が2人、c（世界的な文化を目指すべき）が1人であった。

開始時と終了時を比較すると、bが2人、cが1人、それぞれ増加した一歩、dは3人減少している。

(13) 問8から問12までのまとめ

問8から問12までは、日本人学生3人が回答した。その内容をここで次のように整理できる。第1に、日本全体としての対中国イメージについては、「やや悪い」と認識している。第2に、回答した日本人学生本人の対中国イメージ（終了時）では、「やや悪い」と「どちらでもない」が併存している。第3に、自国と中国の（外交上の）懸案については、貿易・経済と環境に注目している。第4に、政府間の懸案と観光の優先度については、懸案解決を優先すべきとの見方をする人が2人、双方とも重要と考えるものが1人であった。第5に、日本の文化と留学生の出身国の文化の関係について、事前アンケートでは、双方のよいところに注目すべきと考えるものが3名であった。事後アンケートでは、b（日本の文化がもっとも大切）が2人、c（世界的な文化を目指すべき）が1人になった。

(14) この観光で印象に残る体験

問13では、「この観光で印象に残る体験」を、最大3つまで答えるよう求めた。留学生、日本人学生とも、「楽しかった」「面白かった」とい

う趣旨の回答なので、ここでは割愛する。

(15) 日本または中国に対する学生自身のイメージの変化

問14では、この観光を通じて、留学生の日本に対するイメージ、ならびに日本人学生の中国に対するイメージの変化の有無を尋ねた。その結果は、a（変化した）が5人、b（変化しなかった）が12人であった。「変化した」と回答した5人はいずれも留学生である。また変化の内容であるが、a（プラスの変化）が4人、b（マイナスの変化）が1人であった。

「変化した」と答えた理由として、次の回答が得られた。初めの4点は、プラスの変化に関する回答で、最後の1点はマイナスの変化に関する回答である。

- ・各地の歴史、文化は深くにんちできた。魅力的な気がする。
- ・日本の観光業は私が想像していた以上にすばらしかった。
- ・日本の文化の様々な種類は私のイメージよりももっと多くです。古代の忍者文化とか、近代の工業文化とか、漫画文化など。
- ・日本の人々は、他人の視線をきにしない、そんな精神は、かっこいいと思います。
- ・観光産業全体を見ました（マイナスの変化）一方「変化しなかった」と答えた理由として、次の回答が得られた。

- ・私は日本のイメージずっといいと思う。私と思うと同じです。
- ・画像は足止めの歴史たした。
- ・日本へ来る4年になったから、イメージはあまり変化しなかった。
- ・この前と一緒に想像と同じようなことを見ました。
- ・変化しなかった。日本の漫画とか、環境とかと私は最初からにほんに來っての印象日本に対するイメージが変化しなかった。

以上は留学生の回答であるが、次の3つは、

「変化しなかった」とした日本人学生の回答である。

- ・特に変化するような出来事が無かったから。
- ・国に対してのイメージなので、その国に行かないと変化しないから。
- ・あまりその国に対する情報はなかったように感じた。

(16) 問15では、今回の研修で（学んだこと、感じたこと）について、自由回答を求めたところ、次のような回答が得られた（一部省略）。

- ・前の忙しい港と現在を比べて、日本の発展と変化を感じできる。大九州東方祭と漫画ミュージアムに日本漫画産業の発展と繁栄を感じます。
- ・行った地区の歴史を学んだ。いろいろな雰囲気を感じた。皆さんと先生と一緒に楽し時間を過ごした。
- ・楽しい時間はいつも早いが、今回の観光研修を通して、日本の文化や歴史、そしてきれいな場所と美味しい料理に対して、もっと深い了解をしました。
- ・今回の研修はいろいろ所へ行きました。（中略）九州地区の前の〇しい歴史と現在を比べて、日本の発展と変化を感じできます。
- ・日本のサブカルチャー文化を好む外国人が多いのだということ。

### 3 調査結果の整理

以上から見えてくるのは、調査に協力してくれた学生たちの間には、国家間の外交問題と、個人どうしの交流とを一定の程度区別する傾向が存在することである。調査結果のポイントを再確認するならば、次の通りである。国全体としての相手国イメージについて、留学生は「比較的良好」と認識し、日本人学生は「やや悪い」と認識している。次に学生自身の相手国イメージであるが、留学生は良好である一方、日本人

学生は「やや悪い」ないし「どちらでもない」と回答した。外交上の懸案と観光の優先順位については、懸案最優先あるいは観光最優先という両極端を選んだ回答者はいなかった。さらに両国間の文化について、自国と相手の国の文化の双方のよいところに注目する、いわばハイブリッド文化の志向が、留学生の間に強かった。なお、この調査の標本数が小さいため、この結果は一般化できないことを、ここで再確認する。

留学生と日本人学生と一緒に観光したという共通経験は、相互の親近感の醸成にとって効果が皆無ではない。とはいえ、二つの国々の人たちのあるグループが、あることがらについての体験を共有したからと言って、双方の人たちがすべてのことについて共感できるわけでもない。まして両国の人たちすべてが、相互に仲良くなるわけでもない(楊 2013)。とはいえ、この観光研修に参加し、アンケート調査に協力してくれた学生たちは、このような共通経験の長所と限界の双方を、あらかじめ認識していたと考えられる。

## おわりに

本稿のねらいは、ポピュラー文化と地域社会の文化を知る観光が、観光者の国際関係の認識、より具体的にはホスト国に対するイメージに、影響することがあるかどうかを考察することであった。

第1章では、地域アイデンティティ概念をとりあげ、東アジアではその構築が進んでいないことを述べた。第2章では、日本と中国、ならびに日本と韓国の間で、それぞれの国に対してどのようなイメージを持っているかに関わる世論調査の結果を示した。どちらのケースでも、マイナスのイメージの方がプラスのイメージよりも強いことが分かった。これは、東アジアにおいて地域主義ならびに地域アイデンティティの構築が進んでいないことの裏返しである。こうしたマイナスイメージの形成に、中国と韓国ではマスメディアの影響の強いことも述べた。

その一方で、日本に対するイメージ形成の要因として、観光の経験も存在することが分かった。

第3章では、ポピュラー文化と地域社会の文化を知る観光を経験した学生たちを対象とした、アンケート調査の結果を報告した。調査に回答した留学生たちには、元々日本に対してプラスのイメージを持つ傾向のあることが分かった。また、国家間の懸案と個人レベルでの交流に一定の区別をつける傾向があることも、明らかになった。

以上から、国際観光がゲストに以前からあったホスト国へのプラスのイメージを裏付けたり強化したりする可能性のあることが、考えられる。今後の課題としては、今回行ったのと同様の調査の標本数を増やすことと、観光をする前の時点で既に存在していたプラスのイメージの形成がどのように行われるかについて、調査を行いたい。

## 謝 辞

本稿の第1稿に対し、査読者の方から有益なご助言をいただいた。ここに記して、謝意を表したい。

## 注

- 1) 経済地理学者の山川(2011)は、「地域アイデンティティは国家を前提する時代から必ずしも国家を前提とはしない時代にかけて」と述べる(p. 83)。さらには、「地域アイデンティティにおいて共同性が基盤となるのは、それが行為における過去の経験の蓄積から醸成される信頼と未来への延長としての信用を併せ持つものとして構築されてきているからである」とも言う(p. 84)。
- 2) 岡本(2010)は、ドイツの地域アイデンティティ論に関し、「共同体への忠誠が心理的強制となる状態のとき、地域アイデンティティが存在する」と述べている。この点についての考察は、筆者にとり今後の課題である。仮にこれを、いわば「強い」地域アイデンティティとするならば、筆者が考えているのは「弱い」地域アイデンティティと言えるように考える。
- 3) こうした現状を踏まえ、現代の東アジアにおける地域主義の検討にあたっては、EU型統合よりも、19世紀のヨーロッパ協調のイメージの方が適

切との観点もある（岡本 2010：274）。

- 4) より具体的には、親近感の醸成が、「東アジア・アイデンティティ」の構築の糸口となりうると、倉田（2006）は述べる（pp. 2-3）。
- 5) 観光には、国際関係における排他的なナショナリズムへの反証となる可能性が期待されると、筆者は考える。筆者が世論調査、ポピュラー文化と地域文化の三者に注目するのは、このためである。そこで以下では、次の4つについて述べる。①地域主義と地域アイデンティティ、②国際関係にとっての国際観光の特徴、③世論調査、④ポピュラー文化と地域文化。上述のような可能性が果たしているのか、またこれら三者の関係についての筆者の議論の妥当性の検証は、当然、今後の課題である。また以下の記述は注としてはやや長くなり、不適切であることは承知しているが、ご容赦いただきたい。

#### ①地域主義と地域アイデンティティ

個人のアイデンティティは、その人が他の人たちとどのような関係を築くかに影響する。同様に集団のアイデンティティは、その集団が他の集団とどのような関係を築くかに影響する。本稿で筆者は、集団のアイデンティティに注目する。

個人のアイデンティティは、その人の人生の過程において変化しうる。また集団のアイデンティティも、その集団の活動の過程において変化しうる。このことは、「日本人」というアイデンティティにもあてはまる。古代日本（7～8世紀）の大和と異なる集団アイデンティティには、例えば蝦夷や隼人があった。また「日本国民」という集団アイデンティティは、明治時代以降に形成された。

今日の日本人が、自分が国籍を持つ国に対するアイデンティティに加え、より大きな（国際関係における）地域に一定の集団アイデンティティに対する持つことは、不可能ではない（ここで述べているのは、このことがすべての日本人に可能であるとか、そうすべきであるという話とは別である）。これはつまり、「自分は日本人であるし、アジア地域の一員でもある」、「自分は日本人であるが、アジア地域の人たちとも仲間である（なれる）」と考える・感じることである。EUが機能するヨーロッパには、「自分はA国のB地方の人間であり、A国の国民でもあり、かつヨーロッパの一員である」との自己認識を持つ人たちもいると聞く（なお周知のとおり、2015年以降、ヨーロッパでは難民に対する見方が厳しくなっている。こ

れに伴い、上記のような複数の自己・集団アイデンティティのありかたが変化するのだろうか、今後注視する）。

#### ②国際関係にとっての国際観光の特徴

国際観光の特徴の一つは、観光者が本人の意思で外国を訪れ、観光をすることである。このとき観光者は、訪れた外国の文化に接触する。冷戦期までの国際文化交流は、文化の発信国が自国の文化を、その受信国の国民に向けて発信することが多かった。こうした文化の発信の効果の確認も、筆者の課題である。しかしながら、国際観光を通じての文化の発信は、少なくとも質的に効果の高いことが予想される。

#### ③世論調査

絶対王政の時期には、統治者の意向が国家の意向であった。自由主義経済以降、民間の一部（高収入層）の意向も、政治に影響し始める。さらに普通選挙の始まりと、国民の意向が政治に影響し始めたことは、表裏をなす関係にある。

外交担当者が、民間の意見（世論）にそのまま従うことは、考えにくい。しかし、常にまったく無視できるわけでもない。世論が外交に影響する場合のあることは、近代以降の国際関係の特徴の一つである。反対に内政上の理由で、政府が対外的に強硬な政策をとることは過去にもあったし、今後もありうる。

これらのことを踏まえると、世論調査の結果から、排他的なナショナリズムが、調査回答者にどの程度影響しているか、その傾向を読み取ることが可能であると考えられる。

#### ④ポピュラー文化と地域文化

ポピュラー文化も地域文化も、排他的なナショナリズムに対する部分的な反証たりうる。そしてアジア地域における地域アイデンティティの形成に向け、貢献する場合がありますと考える。

まずポピュラー文化に関しては、異なる文化を持つ人たちが「同じ作品」から受けた感銘を共有することができる。こうした共通体験が一つのきっかけとなり、排他的なナショナリズムとは異なる、地域アイデンティティに通じうる感覚を、当事者たちが持つ場合があると、筆者は考える。

次に地域文化に触れることで、訪日観光客が、「自分の国でも都市社会と地域社会の間には違いがある。同様の違いが、日本にもある」と実感することが可能であると、筆者は考える。

現代日本のポピュラー文化が外国で人気である

と伝えられて、すでに久しい。現代日本のポピュラー文化として有名なマンガやアニメの作品の中には、「日本のマンガ(アニメ)」(いうなれば Japanese national manga/anime とでもいうべきもの)という性質を持つものがあると考えられる。「鉄腕アトム」、「ドラえもん」、「アンパンマン」、「ONE PIECE」などが該当すると考えられる。一方、例えば「さんてつ」(吉本浩二)や「ペコロスの母に会いに行く」(岡野雄一)に描かれているできごとは、21世紀初頭の岩手や長崎に生きる人たちの生活に深く根ざすものである。しかしそこには、翻訳されれば外国の人たちにも共感が可能な、普遍性が織り込まれている(なお「日本のマンガ(アニメ)」という表現をしたが、これは national culture と local community culture の対比を明らかにするために用いたものである。排他的になりかねない「日本賛美」を意図するものではない)。

訪日観光客は、日本各地の地域社会の文化に触れることを通じ、東京・大阪・名古屋といった大都市の中心部(メトロポリス)とは異なる、日本の地域社会の文化の多様性に触れる機会が得られると考えられる。つまり、国のレベルとは別に、地域社会のレベルで見るとき、日本文化の中に多様性があると気づく機会である。

- 6) これらの世論調査結果に映し出されている国際関係のできごとには、次のものがあると考えられる。2006年9月、安倍内閣(第1次)発足。2007年9月、福田内閣発足。2007年12月、冷凍食品の毒物汚染事件。2010年9月、尖閣諸島沖での衝突事件。2012年9月、日本政府が尖閣諸島を購入(高井 2012)。2015年10月、日中韓首脳会談が、韓国のソウルで開催される。なお2012年11月には習近平氏が、中国共産党中央委員会総書記に、翌年3月には国家主席ならびに国家中央軍事委員会主席に、それぞれ就任している。
- 7) もともと日本に好印象を持つ人が観光する、という因果関係が当然考えられる。この点については、今後さらに調査したい。
- 8) 2015年の調査結果について、次のとおり補足する。①(4)と(5)の選択肢は示されていない。ただし、(1)~(3)への依存度が下がったことが示されている。②一方、「日本への訪問経験がある」人は7.9%(昨年6.4%)、「親しい」、「多少話をしたりする」日本人の友人がいる人は7.3%(昨年3.1%)であると述べている(p. 45)。

- 9) これらの世論調査結果に映し出されている国際関係のできごとには、次のものがあると考えられる。2011年12月、野田首相と李明博大統領が「慰安婦問題」で対立。2012年8月、李大統領が竹島(独島)に上陸。2013年4月、日本の政治家198人が靖国神社参拝。2013年12月、安倍首相が靖国神社に参拝。

- 10) 日本でのテレビと書籍の影響の度合いの確認は、筆者にとり今後の課題である。
- 11) この研修の行程と研修箇所の大略は、次の通りである。

第1日(2015年9月24日)肥前夢街道(忍者のテーマパーク)(佐賀県嬉野市)

第2日(9月25日)軍艦島(長崎県長崎市)門司港レトロ地区(福岡県北九州市)

第3日(9月26日)門司港レトロ地区、三宜楼、北九州市漫画ミュージアム(福岡県北九州市)

第4日(9月27日)第9回 大九州東方祭12(福岡県北九州市)

これらのうち、まずポピュラー文化に分類できるのは、①肥前夢街道、②北九州市漫画ミュージアムと③大九州東方祭である。①では忍者の世界を体験できる。②と③の北九州市漫画ミュージアムならびに大九州東方祭12では、現代日本のマンガ・アニメ文化の創造の歴史、ならびに流通・消費の実情を知ることができる。

次に地域文化に分類できるのは、④軍艦島、⑤門司港レトロ地区、⑥三宜楼である。いずれの観光対象からも、19世紀末から20世紀前半にかけて九州の工業化が盛んであったことを、エネルギーの生産、物流、経済的に余裕がある人たちの交際とそこに派生する文化、の各側面から知ることができる。

- 12) アンケート調査の内容は別記の通り。
- 13) なおこの調査内容については、本学国際観光学科学研究倫理委員会の審査を事前に受け、実施について了承を得た。また調査開始時に調査の内容及び目的を説明した。
- 14) 当該科目履修者数29人が、回答者数17人となった経緯は次の通り。①調査開始の時点で、調査への協力を辞退した者が2人、②アンケートAを提出したものが27人、③アンケートB配布の時点で、調査への協力を辞退した者が1人、④アンケートBを提出しなかったものが9人、⑤アンケートA、アンケートBともに提出したものが17人である。

## 参考文献

- アンダーソン, ベネディクト (1997) 増補 想像の共同体. NTT 出版.
- 大庭三枝 (2000) 「境界国家」と「地域」の時空論—日豪の地域アイデンティティ模索とアジア太平洋地域の創出. レヴァイアサン26, 99-131.
- 岡野雄一 (2012) ペコロスの母に会いに行く. 西日本新聞社.
- 岡本至 (2010) 東アジア共同体と政治体制: 理念型としてのヨーロッパ協調. 文京学院大学外国語学部文芸学院短期大学紀要 9: 265-281.
- 金俊昊 (2013) 国際統合論: 地域自決主義の比較統合論的分析. 日本評論社.
- 倉田徹 (2006) 東アジア文化の構築. 早稲田大学 COE 現代アジア学の創生 ワーキングペーパー.
- ゲルナー, アーネスト (1983 [2000]) 民族とナショナリズム. 岩波書店.
- 言論 NPO (2015) 第3回 日韓共同世論調査 日韓世論比較結果 (2015年5月)  
<http://www.genron-npo.net/pdf/150529.pdf>  
 2015年7月25日 取得
- (2014) 第10回日中共同世論調査 (2014年)  
<http://www.genron-npo.net/pdf/2014forum.pdf>  
 2015年7月25日 取得
- 日本政府観光局 (2016) 平成27年 訪日外客数・出国日本人数.

- [http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press\\_releases/pdf/20160119\\_1.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/20160119_1.pdf) 2016年1月20日 取得
- 笹岡雄一 (2012) グローバル・ガバナンスにおける開発と政治: 国際開発を超えるガバナンス. 明石書店.
- 高井潔司 (2012) 現代中国を知るための40章 (第4版), 明石書店.
- 滝知則 (2015) 現代日本におけるインバウンド観光にとつてのポピュラー文化の意義. 長崎国際大学論叢 15: 43-57.
- 山川充夫 (2011) 地域アイデンティティの再構築に向けて—経済地理学からの接近—. 学術の動向 16, 3: 79-84.
- 吉本浩二 (2012) さんてつ—日本鉄道旅行地図帳 三陸鉄道 大震災の記録. 新潮社.
- 楊大慶 (2013) 1950年代における戦争記憶と浅い和解—元日本軍人訪中団を中心に. 劉傑・川島真編, 対立と共存の歴史認識—日中関係150年, 東京大学出版会, pp. 191-222.
- 吉野良子 (2012) 地域統合とアイデンティティ. 山本吉宣他編, 国際政治から考える東アジア共同体, ミネルヴァ書房, pp. 261-276.
- Deutsch, Karl W. et al. (1957) *Political Community and the North Atlantic Area: international organization in the light of historical experience*. Westport, CT: Greenwood Press.

## アンケート調査票

「訪日観光がゲストの対ホスト国イメージに与える影響—九州の大学生の観光の事例をめぐって」

## アンケートA 研修開始時用 (2015年9月24日) (解答欄省略)

〈次の問いには、全員が答えてください。〉

## I あなたの出身国と出身地を教えてください。

- あなたの出身国 (いずれか一つに○をつける、④の場合は記入する) 留学生 ①中国、②韓国、③ベトナム、④ ①～③以外の国、日本人学生 ⑤日本
- あなたの出身地 ①省 (中国)、②道・市 (韓国)、③市 (ベトナム)、④市 (①～③以外の国)、⑤県 (日本)

〈「1. あなたの出身国」で①～④と答えた人は、次のIIに進んでください。⑤と答えた人は、IIIに進んでください。〉



II 次の3～7には、留学生が答えてください。

3. あなたの国全体で、日本に対するイメージはどうだと思いますか？ あなたが選んだ選択肢の番号を、右の欄に記入してください。
- a. とても悪い、b. やや悪い、c. どちらでもない、d. まあ良い、e. とても良い
4. あなた自身の日本に対するイメージは、次のどれですか？ あなたが選んだ選択肢の番号を、右の欄に記入してください。
- a. とても悪い、b. やや悪い、c. どちらでもない、d. まあ良い、e. とても良い
5. 日本とあなたの国の間の懸案で、あなたが最も気になるのは、次のどの分野のものですか？ あなたが選んだ選択肢の番号を、右の欄に記入してください。
- a. 安全保障・軍事、b. 貿易・経済、c. 環境、d. 歴史認識、e. その他（具体的に）  
なおeを選んだ場合、具体的にどのようなことかを、下の欄に簡潔に記入してください。
6. あなたにとって、上記5で選んだ懸案と観光を比べると、どちらが重要ですか？ 次の選択肢から選んだものの記号を、右の欄に記入してください。
- a. 懸案の解決が最優先である  
b. 懸案の解決の方を、観光よりもやや優先すべきである  
c. どちらも同じくらい重要である  
d. 観光の方を、懸案の解決よりもやや優先すべきである  
e. 観光が最優先である
7. あなたは、自国の文化と日本の文化との間に、どのような関係があるのがよいと思いますか？ 次の選択肢から選んだものの記号を、右の欄に記入してください。
- a. 自国の文化が最も大切であり、日本の文化を受け入れるべきでない。  
b. 日本の文化が最も大切であり、自国の文化を受け入れるべきでない。  
c. 日本の文化でも自国の文化でもない、世界的な文化を持つことを目指すべきである。  
d. 日本の文化と自国の文化の、双方のよいところに注目すべきである。

留学生対象のアンケートAの質問は、以上です。ご協力、どうもありがとうございます。

III 次の8～12には、日本人学生が答えてください。

8. 中国、韓国とベトナムの中から、一つの国を選んでください。日本全体として、その国に対するイメージはどうだと思いますか？あなたが選んだ国の名前と選択肢の番号を、右の欄に記入してください。
- a. とても悪い、b. やや悪い、c. どちらでもない、d. まあ良い、e. とても良い
9. あなた自身のその国に対するイメージは、次のどれですか？ あなたが選んだ選択肢の番号を、右の欄に記入してください。
- a. とても悪い、b. やや悪い、c. どちらでもない、d. まあ良い、e. とても良い
10. その国と日本の国の間の懸案で、あなたが最も気になるのは、次のどの分野のものですか？ あなたが選んだ選択肢の番号を、右の欄に記入してください。
- a. 安全保障・軍事、b. 貿易・経済、c. 環境、d. 歴史認識、e. その他（具体的に）  
なおeを選んだ場合、具体的にどのようなことかを、下の欄に簡潔に記入してください。
11. あなたにとって、上記5で選んだ懸案と観光を比べると、どちらが重要ですか？ 次の選択肢から選んだものの記号を、右の欄に記入してください。

- a. 懸案の解決が最優先である
  - b. 懸案の解決の方を、観光よりもやや優先すべきである
  - c. どちらも同じくらい重要である
  - d. 観光の方を、懸案の解決よりもやや優先すべきである
  - e. 観光が最優先である
12. あなたは、日本の文化と8で選んだ国の文化との間に、どのような関係があるのがよいと思いますか？ 次の選択肢から選んだものの記号を、右の欄に記入してください。
- a. 自国の文化が最も大切であり、日本の文化を受け入れるべきでない。
  - b. 日本の文化が最も大切であり、自国の文化を受け入れるべきでない。
  - c. 日本の文化でも自国の文化でもない、世界的な文化を持つことを目指すべきである。
  - d. 日本の文化と自国の文化の、双方のよいところに注目すべきである。
- 日本人学生対象のアンケートAの質問は、以上です。ご協力、どうもありがとうございます。

アンケートB 研修終了時用（2015年9月27日）

（アンケートBに、質問1と質問2はありません。）

II 次の3～7には、留学生が答えてください。

（質問と回答の選択肢は、アンケートAに同じ。）

この次は、IVに進んでください。

III 次の8～12には、日本人学生が答えてください。

（質問と回答の選択肢は、アンケートAに同じ。）

この次は、IVに進んでください。

IV 次の13～15には、全員が答えてください。

13. この観光で印象に残る体験（最大3つまで）について、質問します。
- (1) 最も印象に残る体験について
    - a. どこで、何をした体験ですか？
    - b. その体験があなたの印象に残る理由は、何ですか？
  - (2) 2番目に印象に残る体験について
    - a. どこで、何をした体験ですか？
    - b. その体験があなたの印象に残る理由は、何ですか？
  - (3) 3番目に印象に残る体験について
    - a. どこで、何をした体験ですか？
    - b. その体験があなたの印象に残る理由は、何ですか？
14. この観光を通じて、あなたの日本に対するイメージ（日本の学生は、9月24日のアンケートで選んだ国に対するイメージ）は変化しましたか？
- (1) a. 変化した b. 変化しなかった（どちらか一方に○を付ける）
  - (2) 上記(1)でaを選んだ（「変化した」と答えた）場合、それはあなたにとってプラスの意味の変化ですか？ それともマイナスの意味の変化ですか？
    - a. プラスの意味の変化 b. マイナスの意味の変化（どちらか一方に○を付ける）
  - (3) 上記(1)でaを選んだ（「変化した」と答えた）場合、変化した理由は何ですか？

(4) 上記(1)でbを選んだ(「変化しなかった」と答えた)場合、変化しなかった理由は何ですか？

15. 今回の研修で(学んだこと、感じたこと)について書きたいことがあれば、下の欄に記入してください。

アンケートBの質問は、以上です。ご協力、どうもありがとうございます。